

開館120年記念

写真でたどる 奈良国立博物館のあゆみ



Celebrating the 120th Anniversary of the Founding:
The Historical Path of Nara National Museum as Seen in Photographs

ごあいさつ

奈良国立博物館が開館したのは、明治28年(1895)4月29日(当時は帝国奈良博物館)。現在の東京国立博物館に次いで、わが国で2番目に古い国立博物館として誕生しました。

それから今年で120年。仏教美術を専門とする博物館として、周辺はもとより全国の社寺や関係各位のご協力をえて、文化財の保存・研究・公開に力をそそいでまいりました。この間、西新館・東新館と展示施設の拡充をはかるとともに、名品展や数々の展覧会を開催し、文化財との出会いの場として観覧者の皆さまと長い時を過ごしてまいりました。また、平成元年(1989)には仏教美術資料研究センター、平成14年(2002)には文化財保存修理所をオープンし、学術情報資料の蓄積と公開、文化財の保存修理など、文化財に関わる幅広い領域に活動の場を広げて現在にいたります。

開館当初の建物である片山東熊設計による博物館本館は、平成22年(2010)より「なら仏像館」と名を改め、仏像彫刻専門のギャラリーとして皆さまに親しんでいただいておりますが、建物の修繕と展示環境のさらなる充実のため、平成28年(2016)4月の再開を目指して現在改修工事を進めております。このたび、開館120年を記念してパネル展示をおこない、今日までのあゆみを懐かしい写真とともに振り返ります。これまでの歴史に思いをはせるとともに、今後の奈良国立博物館にもご期待いただければ幸いです。

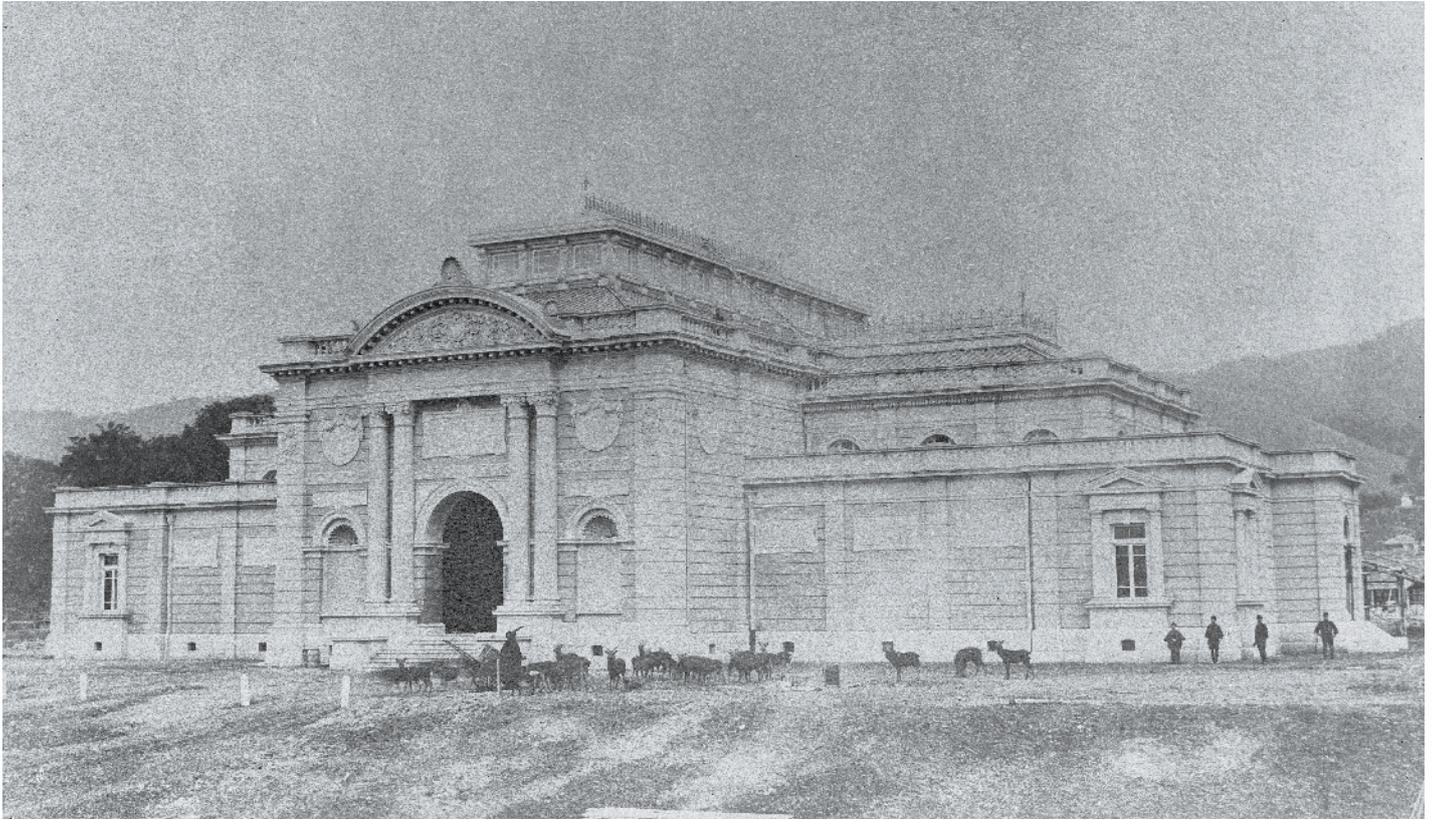
最後になりましたが、パネル展示開催にあたりご協力を賜りました関係各位に厚くお礼を申し上げます。

平成27年7月

奈良国立博物館館長 湯山 賢一

1

帝国奈良博物館の開館 明治28年(1895)

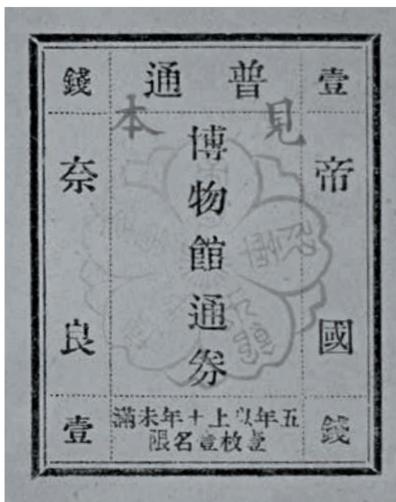


帝国奈良博物館本館 明治27年(1894) 竣工当時

奈良国立博物館が開館したのは、明治28年(1895)4月29日(当時は帝国奈良博物館)。建物の竣工は前年12月のことで、冬場を挟んだために内部の壁面が乾ききらないまま、半年を待たずに開館の日を迎えた。比較的乾燥のはやかった中央第1室と南半分のみを展示室とし、陳列品は、御物・宸翰・美術工芸品・歴史資料からなつた。当時の記録を紐解くと、聖徳太子画像、法華義疏、水瓶(龍首水瓶 法隆寺献納宝物)や金銅三躰仏(法隆寺献納宝物か)といった御物、華族出陳の宸翰、帝国博物館(現在の東京国立博物館)から借用した作品などの名がみえ、館藏品や寄託品もないままに慌ただしく開館の日をむかえた様子が見えがえる。しかし当時の新聞は「重宝・珍品夥しく、參觀人頗る多し」「観覧人員を制限せらるることもあるや」とその盛況ぶりを

伝えている。5月はじめの休日には連日6,000人の入館者があり、館内は立錐の余地もなかったという。

奈良国立博物館の敷地は興福寺の旧境内地で、建物の設計にあたったのは宮内省内匠寮技師、片山東熊である。奈良県下最初の西洋建築であったため市民の期待も大きく、建設工事中から見物人が絶えなかった。博物館は文化財を保護するに相応しい煉瓦造の堅牢な構造で、当時ヨーロッパで流行したバロック風の可憐な意匠をまとってこの奈良の地に誕生した。



開館当時の入館券(博物館通券)



壬申検査関係写真 正倉院御物(東京国立博物館蔵)

明治時代初頭、「神仏判然令」に端を発する廃仏毀釈や諸制度の改変による寺院の経済的困窮は、信仰の対象としてながく守り伝えられてきた仏像や他の寺宝類に大きな影響を及ぼし、維持管理が困難な状況から寺外へと流出するものもあった。こうした事態を重くみた政府は、明治4年(1871)に太政官布告「古器旧物保存方」を公布し、翌年には近畿地方を中心とする古社寺および正倉院の御物の調査へとおもむいた(いわゆる「壬申検査」)。この調査は、明治6年(1873)開催のウィーン万国博覧会への出陳品の下調べもかねていた。

これをさかのぼる慶応3年(1867)のパリ万博を視察していた幕府は、実物展示による国民への教育効果をおおいに実感し、ウィーン万博への公式参加を目指して全国の特産品や書画骨董・標本類など夥しい資料が収集された。それらはまず東京の湯島聖堂において陳列公開され(明治5年・1872)、優品がウィーン万博へと出陳されたのである。湯島聖堂での展示は観覧者におおきな感銘を与え、博覧会という催しは全国へと波及する。奈良においては東大寺大仏殿回廊がその会場となり、陳列品の白眉として正倉院御物の出陳もかなった。各地での博覧会の成功を経て、歴史美術を中心に恒久的な展示をおこなう施設として博物館を建設する計画が進められ、明治22年(1889)に帝国博物館の設立が公布される。これにより既に上野の地にあった博物館を帝国博物館とし、奈良、京都にも博物館をおくことが決定した。

壬申検査にはじまる文化財調査は、明治21年(1888)に臨時全国宝物取調局が設置されると本格的に全国展開され、文化財の所在と保存状況の把握がすすめられていった。この調査は国による指定と修理という今日に続く文化財保護制度が成立する基礎となり、それを受けて設立された博物館は、博覧会に続く文化財の価値を広く一般に伝えるという機能とともに、社寺から什宝の寄託を受けて保存に協力するという重要な役割を担うこととなった。

こうして奈良国立博物館は、信仰の対象であった仏像をはじめとする古器旧物を文化財として保存し、そして公開するという、いまに続く使命をおびてそのスタートをきったのである。

3

正倉院掛が置かれる 大正3年(1914)



◀古裂修復等作業風景(大正4年頃)
(正倉院所蔵資料)



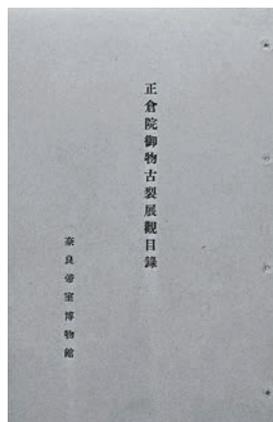
現在の茶室控室(旧修理作業室)

明治33年(1900)、開館から5年を経た帝国奈良博物館は、宮内省の官制改正にともなって奈良帝室博物館と改称された。

つづいて宮内省では、明治41年(1908)に、正倉院を帝室博物館の所管とする。これは明治37年(1904)に宮内省の正倉院御物整理掛が廃止されたことを受け、その業務を引き継ぐものであった。そして大正3年(1914)9月、奈良帝室博物館内に正倉院掛が置かれ、古裂・塵芥・経卷等の整理・修復作業がここへ移された。その整理・修復作業のおこなわれていた建物が現在も敷地内に残っている(茶室控室)。

正倉院掛は終戦まで置かれ、その間には『正倉院御物目録』(大正13年)、『正倉院古文書目録』(昭和5年)、『正倉院聖語藏経卷目録』(同)などが奈良帝室博物館正倉院掛の名で刊行された。また、大正14年(1925)には、整理の一段落ついた古裂を、「正倉院宝物古裂類臨時陳列展」(会期：4月15日～4月30日)で公開している。当時、ごく限られた人しか見ることのできなかった正倉院の御物が一般公開されたため、各方面に異常なセンセーションを起し来館者多数に上ったという。さらに8年後の昭和7年(1932)には、整理品御披露目の第2弾として、「正倉院御物古裂展観」が開催された(会期：4月23日～5月8日)。

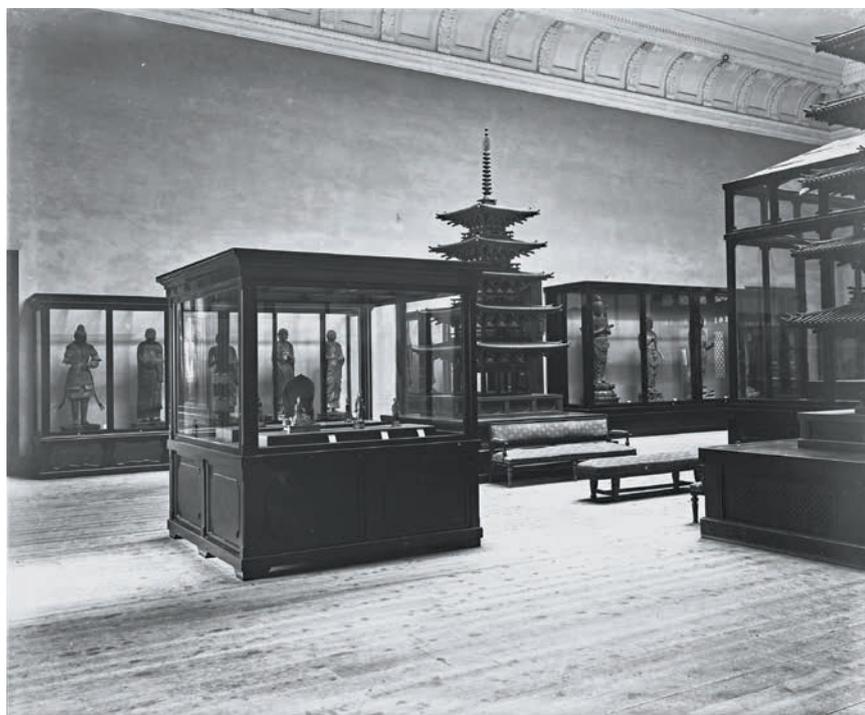
太平洋戦争の戦火が激しさを増してくると、正倉院内の御物を分散して保管(疎開)することが検討されるようになり、戦争末期の昭和20年(1945)7月から一部の御物が奈良帝室博物館の収蔵庫に移され始めた。その移動作業は8月に完了するが、間もなく戦争は終結。この御物疎開が、昭和21年(1946)の「正倉院特別展観」の開催に繋がることになる。



◀「正倉院御物古裂展観」(昭和7年)図録表紙



▲「正倉院御物古裂展観」(昭和7年)図録内面



本館第1室(撮影時期不詳)



阿修羅立像(国宝八部衆立像のうち)(興福寺蔵)

博物館の設置目的は古社寺に伝わった文化財の保存に協力することにあったものの、当初は館藏品や社寺からの寄託品がほとんど揃わないままに開館の日をむかえていた。しかし間もなくして古器旧物の保存という本来の趣旨にのっとり、寄託品の増加につとめた結果、明治36年(1903)開催の「奈良県下国宝品陳列展」には32の社寺から90件を借用し、うち約50件が寄託品となっていた。明治42年(1909)にいたると寄託品の総数は700件を超えるまでになる。

博物館の第1室を写した古写真には、国宝十大弟子および八部衆立像(興福寺蔵)、国宝海龍王寺五重小塔、国宝元興寺五重小塔の姿がみえるが、この他にも国宝観音菩薩立像(百済観音)(法隆寺蔵)など、いまでも美術全集のグラビアを飾る数々の名品がかつて展示室を彩っていた。

こうした仏像を中心とする仏教美術は、一般の観覧者はもとより作家や画家をも魅了し、和辻哲郎、会津八一、亀井勝一郎、堀辰雄、杉本健吉など、博物館での体験を作品に記した文化人は枚挙に暇がない。大正7年から10年(1918~1921)まで帝室博物館総長を務めた森鷗外も、当時帝室博物館主管であった正倉院宝庫開封の儀に参列するため毎年秋に来寧し、「寧都訪古録」、「奈良五十首」を残している。日本人の心の故郷「古都奈良」の重要な要素として、博物館も多くの人々の心象に刻まれていったことだろう。



博物館彫刻室 杉本健吉筆(奈良国立博物館蔵)

正倉院展の始まり 昭和21年(1946)

「正倉院特別展観」(昭和21年)
チケット

同上 絵はがき



同上 進駐軍宛招待状



昭和21年(1946)10月19日、奈良帝室博物館で「正倉院特別展観」が開幕した。厳密に言えば19日は特別招待日、20日は進駐軍招待日であり、21日からが一般公開であった(11月9日まで開催)。

これより先、戦争末期に正倉院御物の疎開措置として、その一部が奈良帝室博物館の収蔵庫に移されていた。戦後、昭和21年の春頃から、これらを正倉院に戻す作業が始まるとの観測からであろうか、御物の公開を望む声が上がリ、同年5月に奈良県観光協会から宮内省へ陳情書が出された。この動きを受けて、帝室博物館総長から宮内大臣宛てに開催へ向けた正式な上申書が出されたが、そこには「再建日本文化の高揚啓発に資する処甚大」と、終戦直後という時代相を反映した開催目的が記されている。展観では、^{がつきろん}楽毅論や^{はくろりのわん}白瑠璃碗などを含む33件が出陳され、合計22日間の開催期間中の入場者数は147,487人であった。

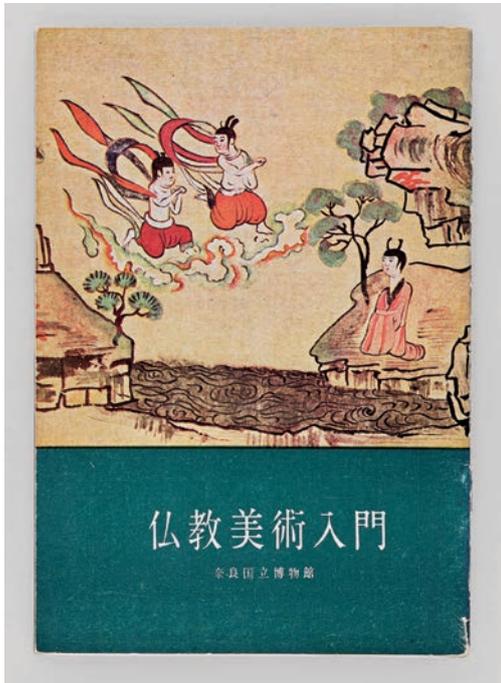


「第15回正倉院展」(昭和37年)展示会場

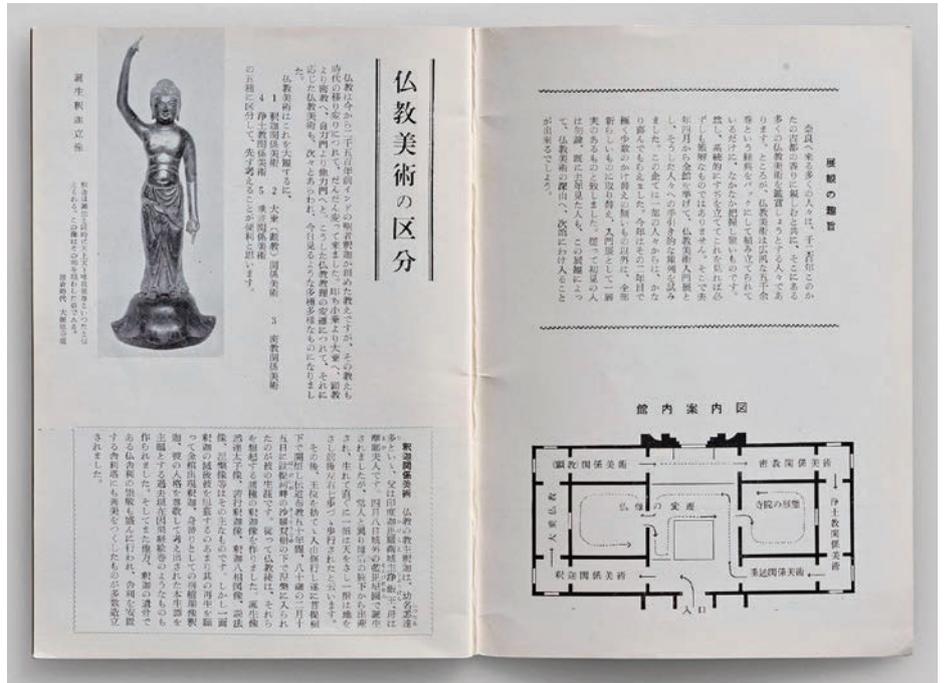


「第19回正倉院展」(昭和41年)陳列館入口付近

翌昭和22年(1947)4月、奈良帝室博物館に保管されていた御物が正倉院へ戻る。同年5月、新憲法の施行とともに、宝庫と宝物は宮内府図書寮の下に置かれた正倉院事務所の所管となり、文部省の下で国立博物館奈良分館と名を変えた博物館とは別の組織になった。宮内府では皇室財産から国有に替わった正倉院宝物が、今後どのように扱われるべきか議論されたようで、前年の「正倉院特別展観」が好評だったこともあり、この年にも10月27日～11月15日を会期として「正倉院御物特別展観」が開催された。以来、東京で開催された3回を除いて毎年、正倉院展がここで開催され、奈良の秋を彩る恒例行事として定着している。



「仏教美術入門展」(昭和33年)図録 表紙



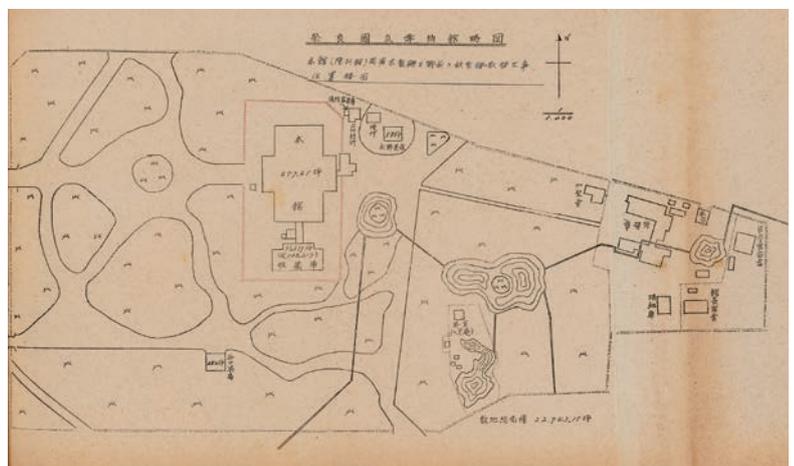
同左 見開き

昭和30年(1955)、開館60周年を記念する「法隆寺献納御物展」(会期：4月10日～5月20日)が開催され、会期中の4月29日には記念式典が奈良県公会堂(当時)で催された。また、60周年と関連するかどうかは不詳だが、翌昭和31年(1956)には陳列館(現在のなら仏像館)の改修工事が実施され、昭和34年(1959)には事務棟が新築される(現存しない)など、この時期に施設面での充実が図られている。

昭和30年代前半は、上記のハード面だけでなく、ソフト面においても、大きな変化の時期であった。それまで奈良の古文化財だけでなく、たとえば「森川杜園遺作展覧会」(昭和18年)、「浮世絵名品展」(昭和22年)、「日本初期洋画」(昭和27年)、「柳里恭展」(昭和32年)など、多彩な内容の展覧会を開催していたが、この時期に仏教美術を展示の柱に据える方針を明確に打ち出したのである。その新構想に基づいて最初に開催された特別展が、昭和33年(1958)の「仏教美術入門展」(会期：4月5日～5月10日)であった。

この展覧会は、「従来の名品羅列のマンネリズムを脱し」、「ストーリーを織り込んだ仏教美術の観賞と研究の手引きに切り替え」たものと新聞紙上で紹介されるなど話題となり、かつその後の展示内容に重要な指針を与えるものとなった。

背景には、昭和25年(1950)に文化財保護委員会が発足して、社寺の収蔵庫等の建設が推進されるようになり、それまで博物館に出品されていた文化財が各社寺へ帰って行くという現象があった。寄託された優品頼みの展示から、脱却を図る必要があったのである。



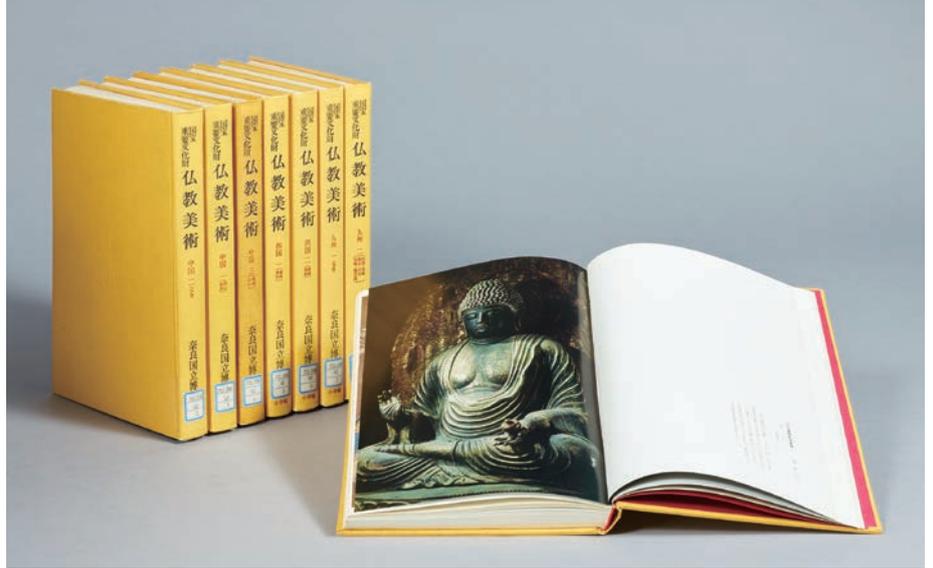
敷地見取図 昭和31年(1956)頃(事務棟の新設前)

7

仏教美術調査 — 体系的な文化財調査と写真撮影のはじまり — 昭和39年から平成4年(1964～1992)



勝常寺(福島県)収蔵庫



『国宝・重要文化財 仏教美術』(北海道・東北、九州、四国、中国 1972～1980)



黒石寺(岩手県)にて(昭和40年代)

奈良国立博物館では、長年にわたって文化財の写真撮影をおこなっている。撮影対象は館藏品にとどまらず国内外の仏教美術に広く及び、写真(近年ではデジタル画像)を研究資料として活用するだけでなく、外部の研究者や出版社などへの提供もおこなっている。皆さんがご覧になる教科書や美術全集に掲載されている美術作品のグラビア写真が博物館撮影のものである場合も少なくない。

文化財の撮影は開館当初からおこなわれていたとみられるが、調査研究の成果として文化財の姿を記録に残し、例えば仏像彫刻の正面・側面・背面・像底などを丁寧に撮影して写真を蓄積していく現在に通じる方法が確立されたの

は、昭和39年(1964)からはじまった全国仏教美術調査が契機となっている。この調査は平成4年(1992)まで続けられ、その一部は『国宝・重要文化財 仏教美術』として刊行された。研究員と写真技師は重い撮影機材^{たずさ}を携え、東北地方を皮切りに全国各地をめぐるのである。

こうした仏教美術写真の蓄積は奈良国立博物館の大きな財産となって現在形成している画像アーカイブズの重要な部分をしめている。いまでも特別展や社寺調査などの機会に撮影は続けられているが、年間の撮影数は5,000枚に達し、蓄積された写真の総数は380,000枚を超える。これらは館内での利用はもちろん、外部からも検索できるようにデータベースとして公開されている。奈良国立博物館の画像アーカイブズは、研究員と写真技師との協業という長い伝統に支えられ、今日にいたっているのである。



新館



新館除幕式



新館で開催された「第26回 正倉院展」(昭和48年・1973)

明治時代の開館以降、唯一の陳列館である本館(現在のなら仏像館)では数々の特別展・平常展をおこない、昭和21年(1946)からは毎年(昭和24・34・56年の東京開催を除く)正倉院展を開催していた。しかし展覧会の充実にもなって展示空間の狭隘さが問題となり、ことに正倉院展開催時における混雑は深刻な問題となっていた。このため昭和29年度(1954)から新館の予算措置を要望しつづけ、昭和37年(1962)にいたってようやく工事関係調査費が計上され、昭和47年(1972)3月に新館(現在の西新館)が竣工した。奈良国立博物館にとって新しい展示施設の完成は長年の宿願だったのである。竣工翌年の4月に落成記念式典が挙行され、春の特別展「経塚遺宝展」で開館となった。また同年から正倉院展は新館で開催されることとなった。

建物の設計は東京藝術大学教授をつとめた吉村順三よしむらじゆんぞう。皇居新宮殿の設計(昭和38年・1963)でも知られる戦後モダニズム建築を代表する建築家で、新館設計により日本芸術院賞を受賞した。

建物は鉄筋コンクリート造地下1階地上2階建てで、1階にピロティをまわして柱から内側に引き込んだ壁面は総ガラス張りとする。ガラス面に周囲の池や松林が映りこむと、1階の柱が浮きたち、高床式の校倉造建物を思わせるデザインである。当初は奈良にコンクリート造の高層建築を新設することをめぐって地元との間で議論がまきおこったが、現在では周辺の景観に配慮した奈良らしい建築として親しまれている。新館の完成により、奈良国立博物館の展示面積はおおよそ2倍に拡張された。

9 仏教美術資料研究センターと文化財保存修理所のオープン 平成元年(1989)・平成14年(2002)



仏教美術資料研究センター（重要文化財旧奈良県物産陳列所）



閲覧室

奈良国立博物館では、開館以来の活動の過程で蓄積された膨大な学術情報資料の運用について体制の整備に取り組み、仏教を中心とした歴史と美術に関する資料を作成・収集・整理・保管し、公開することを目的として、昭和55年(1980)4月に仏教美術資料研究センターを設置した。現在の建物で資料の公開を開始したのは平成元年(1989)からで、国内におかれたミュージアムライブラリーとしては、東京都美術館美術図書室について古い歴史をもつ。活動の内容に「資料の作成」が含まれているのは、長らく撮影を続けている文化財写真の整理と公開がセンター設置の重要な要素の一つだったため、これが他の大学・公共図書館とは大きく異なる特徴である。現在の資料の総数は、図書約87,000冊、雑誌約3,000タイトル、文化財写真約380,000件で、それぞれが館外利用者にも公開されている。また近年は、明治時代から戦前までの文化財修理記録のデジタル化やデータベース化に取り組むなど、仏教美術に関する学術情報資料の一大拠点となるべく、活動の拡充に努めている。

建物は明治35年(1902)に竣工し、奈良県物産陳列所として開館した、わが国を代表する近代和風建築である。設計者は当時奈良技師として建造物修理に尽力した^{せきの だし}関野貞。昭和58年(1983)より奈良国立博物館が管理するところとなり、現在はセンターの建物としてその保存と活用に取り組んでいる。



文化財保存修理所



彫刻室(仏像や大型工芸品などの修理をおこなう)

また平成14年(2002)には、構内に文化財保存修理所が設置された。長い時を経ていまに伝えられた文化財は、その多くが過去に修理を受けることによって大切に保存されてきた。わが国の文化財は、木や絹・紙そして漆など脆弱な素材^{ぜいじやく}がもちいられることが多く、伝統的な修理技術を身につけた技術者によって適切な修理が実施される必要がある。修理所には彫刻・装漬^{そうこう}(絵画や書跡)・漆工の修理をおこなう各工房がおかれ、経験豊富な修理技術者が、国宝・重要文化財およびそれに準ずる貴重な文化財の修理^{たずさ}に携わっている。奈良国立博物館は、修理所の運営にとどまらず、実際の修理にあたって専門的立場から助言をおこなうとともに、修理の過程で得られた情報を広く提供したり、修理完了作品の展示や修理所公開などによって、文化財修理に関する一般への理解の促進にも努めている。

10

開館100年を迎えて 平成7年(1995)



開館100年記念式典



「日本仏教美術名宝展」招待日

昭和48年(1973)に現在の西新館が開館すると、当館の展示面積は劇的に増加し、企画展を大規模に実施できるようになった。昭和50年(1975)の開館80周年記念では春季特別展「仏舎利の美術」(会期：4月27日～5月25日)、昭和60年(1985)の開館90周年記念では特別展「山岳信仰の遺宝」(会期：4月28日～6月2日)など、節目の年には記念展覧会を開催しているほか、昭和49年(1974)から4箇年にわたる大規模改修を経た本館(現在のなら仏像館)の落成記念では、昭和53年(1978)に特別展「日本仏教美術の源流」(会期：4月29日～6月11日)が開催され、当時としては史上最高となる11万8千人の来場者があった(正倉院展を除く)。なお、明治以来の陳列館を「本館」、新しい陳列館を「新館」と呼ぶことが定着したのはこの頃からである。昭和56年(1981)には、新館と本館をつなぐ地下通路が竣工した(平成9年まで使用)。

新館が開館してもなお、正倉院展における混雑は深刻な問題であった。そのため、昭和の終わり頃から更なる展示面積拡張構想が持ち上がり、次第に具体化していく。そうした中、当館は開館から100年の節目を迎えた。

平成7年(1995)4月21日、開館100年記念式典が奈良県新公会堂において催行された。翌日より、開館100年記念の特別展「日本仏教美術名宝展」を開催している(会期：4月22日～6月4日)。これは本館と新館のすべてを会場とし、国宝115件以上を含む総数約210件が出陳されるという大規模なものであった。かつて当館に寄託され、展示室の顔ともなっていた法隆寺蔵の国宝観音菩薩立像(百済観音)の本展への協力出陳が、会期直前になって急遽実現するなど、この特別展は質・量ともに開館100年に相応しい内容となり、38日間の会期中には18万人近い入場者があった。



「日本仏教美術名宝展」ポスター



同上 展示会場



東新館(奥)と西新館(手前)



地下回廊での開館記念式典



特別展「天平」開幕式



「天平」展示会場

中央は頗あにらだいしやう羅大将立像(国宝十二神将立像のうち)(新薬師寺蔵)

平成10年(1998)に奈良国立博物館で3つめとなる展示施設、第2新館(現在の東新館)が竣工した。東新館は地下1階地上2階で、各部門の収蔵庫を備え、文化財の保存環境に配慮した最新の設備を整えた建物である。昭和47年(1972)完成の西新館とほぼ同一の建築デザインで、東西館は中央エントランスで接続され、両館を使用した正倉院展や大規模な特別展の開催、企画展と平常展(現在の名品展)の同時開催が可能となった。増加の一途を辿る正倉院展入館者の混雑への対応と安全性の確保も、同館新設の大きな目的であった。

東西新館は地下回廊によって、なら仏像館とも繋がっている。かつてなら仏像館と西新館とを結ぶ地下道が存在したが、今回は南側の一部を採光用にガラス張りとして、広く明るい空間を確保して面目を一新した。地下回廊にはパネルや仏像模型を展示する教育スペース、ミュージアムショップ、レストランを併設して無料ゾーンとして公開し、より親しみやすい博物館としての機能が盛り込まれた。この東新館の竣工によって、現在の奈良国立博物館が目指す、文化財の調査研究・保存・公開・教育普及の各事業をさらに充実させる舞台が完成したのである。

東新館は、平成10年4月の特別展「天平」で開館した。この特別展は、国宝十一面観音立像(聖林寺蔵)をはじめとする数々の名品により、天平時代の豊かな歴史と文化をしめす展覧会であったが、脆弱な塑像の頗あにらだいしやう羅大将立像(国宝十二神将立像のうち)(新薬師寺蔵)の出陳が叶った点でも画期的な意義があった。以降に続く特別展「東大寺のすべて」(平成14年・2002)や開館120年記念特別展「白鳳」(平成27年・2015)など、移動が困難な文化財について入念な事前調査をおこなったうえで輸送計画を立案し、安全に搬送して展観に供する、という今日の奈良国立博物館のスタイルのいわば先駆けとなった特別展といえる。



「東大寺のすべて」展示会場での法要

平成13年(2001)より、奈良国立博物館は独立行政法人国立博物館の設置する施設となり、これまで以上に観覧者へのサービス向上、業務の効率化に迫られるようになった。この流れにあわせ、特別展を含む企画展示の回数は増加し、規模も次第に大きくなっていく。

平成14年(2002)4月20日、東大寺の大仏開眼1250年を記念する特別展「東大寺のすべて」が開幕した(会期：4月20日～7月7日)。平成10年(1998)に東新館が開館して以降、平常展は本館(現在のなら仏像館)と西新館で、特別展は東西新館でおこなうスタイルが定着しつつあったが、この「東大寺のすべて」では、東西新館および本館のすべてを会場とし、まさに「すべて」を見せる、史上空前の規模となった。東大寺法華堂からの展示品輸送では、脆弱な材質の塑像を動かすということもあり、慎重に慎重を重ねて計画が立てられた。その輸送時には、法華堂から博物館まで通常であれば車で10分の道のりを、トラックで2時間かけて走行し、これを安全に遂行した。この特別展は、展示会場の規模も史上最大であったが、69日間という会期も最長で、入場者数419,240人も過去最多となった(一日平均6,076人)。

同じ平成14年、新たな展示施設が加わった。これは昭和12年(1937)竣工の陳列館附属収蔵庫を改修し、坂本五郎氏より寄贈を受けた中国古代青銅器の展示室としたもので、9月6日に開会式・鑑賞会・レセプションがおこなわれている。



同上 展示品輸送風景(西新館西側)



青銅器館(旧 本館附属収蔵庫)

13

平城遷都1300年記念特別展「大遣唐使展」開催 平成22年(2010)



「大遣唐使展」展示会場

平成15年(2003)以降も、恒例の正倉院展に加え、魅力ある特別展・特別陳列をいくつも開催していたが、平成22年(2010)春の平城遷都1300年記念特別展「大遣唐使展」(会期：4月3日～6月20日)はとりわけ大規模なものとなった。

この年、和銅3年(710)3月に元明天皇が藤原京から平城京に都を遷して1300年になるのを記念し、奈良県を挙げて様々な行事がおこなわれた。奈良国立博物館では、奈良時代の国際的な文化交流に重要な役割を果たした遣唐使をテーマに展覧会を開催することになり、数年前から準備が進められた。ボストン美術館(米国)の「吉備大匠入唐絵巻」や、西北大学文博学院(中国)の「井真成墓誌」などの出陳が叶い、平城遷都の記念に相応しい展覧会となった。刊行した展示図録は392頁もの大冊となり、374頁だった「東大寺のすべて」の図録を抜いて、史上最厚となった。会期69日間の総入場者数は20万人を超えた。

この前年11月から、西新館の耐震補強等工事が始まっていた。工事期間が「大遣唐使展」の会期まで及んだため、展覧会では西新館を使わず、東新館を第1会場とし、本館を第2会場としたのである。平成22年夏に同時開催された特別展「仏像修理100年」・「至宝の仏像」も、それぞれ東新館・本館から改称されたなら仏像館を会場とした(会期：7月21日～9月26日)。工事が完了して展示ケース等の設備が一新された西新館は、同年秋の正倉院展から使用されることになった。



同上 屋外風景(西新館北側)



工事中の西新館内

なら仏像館 保存修理および展示室整備工事 平成27年から28年(2015~2016)

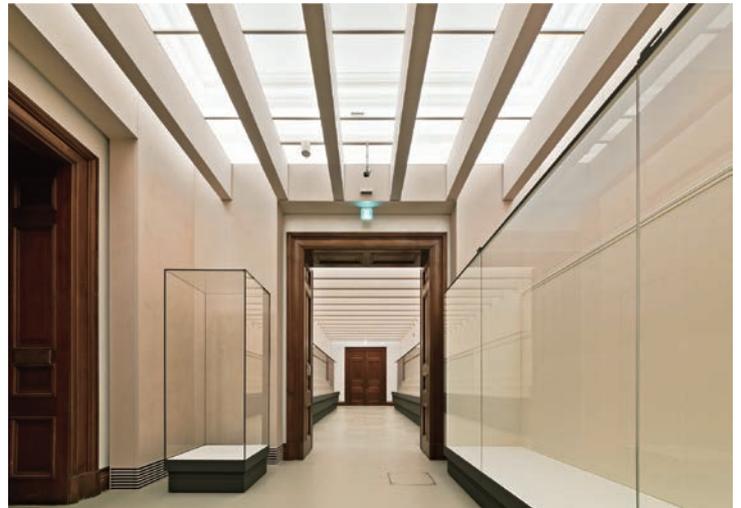


外壁・屋根の保存修理工事が完了した なら仏像館 (平成27年4月撮影)

なら仏像館(重要文化財旧帝国奈良博物館本館)は、わが国に現存する最も古い国立博物館建築であるだけでなく、明治時代に誕生した「日本人建築家」が設計した最初期の西洋建築として、近代建築史上重要な意義をもつ。設計者の片山東熊は工部大学校造家学科(東京大学工学部建築学科の前身)第1期卒業生で、辰野金吾らとともに、当時最新の建築学をまなび、以後、近代を代表する建築を数多く手がけた。その片山が欧州の視察から帰国して、宮内省に移ってから設計をおこなったのがこの建物で、後に迎賓館赤坂離宮(国宝旧東宮御所)を完成させた巨匠が30代後半にはじめて取り組んだ本格的な木骨煉瓦造の西洋建築であった。

建物の着工は濃尾地震(明治24年・1891)の直後であったため、文化財を守るにふさわしく、厚さ90センチメートルの煉瓦造の壁が築かれた。表面はクリーム色の漆喰で塗り込められ、沢田石でバロック風の可憐な装飾が施されている。当時の欧州では、ギリシャ、ローマ、ルネッサンス、バロックなど、過去の建築様式を国家の威信を表象する公共建築にとりいれることが盛んにおこなわれており、この建物にも欧州での学習の成果が示されている。また、堅牢さを求めた結果、壁面に窓がないため天井に採光窓を設けた点など、博物館建築としての工夫も見逃せない。

奈良国立博物館では、この貴重な文化遺産をながく後世に伝えるため保存修理工事をおこなっている。傷んだ屋根葺材を交換して外壁の汚れを洗浄し、現在は展示室の整備工事へと進んでいる。開館当初の内部意匠を活かしつつ、安全でよりよい観覧環境を実現するため、ケースや展示台、照明機器の選択に余念がない。仏堂にまつられてきた仏像を近代建築の中で保存し、文化財として公開する、という開館以来の使命を受け継ぎつつ、新たな工夫を盛り込んだなら仏像館の新装オープンに是非ご期待いただきたい。



整備完了後の展示室(第10室から9室をのぞむ)
(全体の完成は平成28年春)

略年表

和暦	西暦	事項
明治22	1889	5月16日、宮内省の管下に 帝国奈良博物館 の設置が決定する
明治23	1890	12月24日、大乘院庭園内にあった 茶室 が寄贈され、明治25年に博物館敷地内に移設される(現在の 八窓庵)
明治27	1894	12月19日、 陳列館 が竣工する(現在の なら仏像館)
明治28	1895	4月29日、帝国奈良博物館が開館する
明治33	1900	7月1日、 奈良皇室博物館 に名称が変更される
明治41	1908	4月、正倉院が皇室博物館の所管となる
大正3	1914	9月16日、奈良皇室博物館のもとに正倉院掛が設置される
大正4	1915	6月、正倉院の古裂整理等のため 修理作業室 が新築される(現在の 茶室控室)
大正14	1925	4月15日～4月30日、「正倉院宝物古裂類臨時陳列展」開催
昭和7	1932	4月23日～5月8日、「正倉院御物古裂展観」開催
昭和12	1937	10月31日、陳列館の南に、新たに 収蔵庫 がつけられる(現在の 青銅器館)
昭和20	1945	7月10日、戦争激化のため休館し、終戦後の同年12月5日に再開する
昭和21	1946	10月21日～11月9日、「正倉院特別展観」(第1回正倉院展)開催
昭和22	1947	5月3日、所管が宮内省から文部省へ変わり、名称も 国立博物館奈良分館 に変更される。同時に、正倉院は宮内府へ移管される
昭和25	1950	8月29日、文化財保護法の施行にともない、国立博物館奈良分館は文化財保護委員会(後の文化庁)の附属機関となる
昭和27	1952	8月1日、 奈良国立博物館 に名称が変更される
昭和30	1955	4月10日～5月20日、開館60周年記念として「法隆寺献納御物展」開催
昭和33	1958	4月5日～5月10日、「仏教美術入門展」開催(翌年にも同名の展覧会を開催)
昭和39	1964	この年より、仏教美術調査を開始する(平成4年まで)
昭和40	1965	5月～7月、春日東西塔跡周辺が発掘調査される
昭和42	1967	4月、陳列館の南東に、新館を建設することが決まる
昭和44	1969	3月12日、陳列館(本館)が「旧帝国奈良博物館本館」として重要文化財に指定される
昭和47	1972	3月31日、 新館 が竣工する(現在の 西新館)
昭和48	1973	4月29日～5月27日、新館開館記念として「経塚遺宝展」開催
昭和50	1975	4月27日～5月25日、開館80周年記念の春季特別展「仏舎利の美術」開催
昭和55	1980	4月5日、館内組織として仏教美術資料研究センターが設置される
昭和56	1981	3月17日、新館と本館をつなぐ地下通路が竣工する(平成9年まで使用)
昭和58	1983	4月1日、重要文化財「旧奈良県物産陳列所」が奈良国立博物館へ所属替えとなり、 仏教美術資料研究センター の庁舎とする
昭和60	1985	4月28日～6月2日、開館90周年記念として特別展「山岳信仰の遺宝」開催
平成元	1989	5月10日、仏教美術資料研究センターの一般公開を開始する
平成6	1994	10月21日、 第2新館(仮称) の建設を開始する(現在の 東新館)
平成7	1995	4月22日～6月4日、開館100周年記念の特別展「日本仏教美術名宝展」開催
平成9	1997	3月、新館と本館をつなぐ新たな地下回廊が竣工する
平成10	1998	3月、東新館が竣工する 4月25日～6月7日、東新館開館記念の特別展「天平」開催
平成13	2001	4月1日、法令の改訂により、独立行政法人国立博物館の設置する施設となる
平成14	2002	2月21日、敷地内に 文化財保存修理所 を開設し、この日、開所式典が開かれる 4月20日～7月7日、特別展「大仏開眼1250年 東大寺のすべて」開催 9月6日、本館附属収蔵庫を改修した中国古代青銅器(坂本コレクション)の陳列室が開館する
平成19	2007	4月1日、法令の改訂により、独立行政法人国立文化財機構 奈良国立博物館となる
平成22	2010	4月3日～6月20日、平城遷都1300周年記念特別展「大遣唐使展」開催 7月、本館の展示室を改修し、なら仏像館と改称する 8月31日、西新館の耐震等改修工事が完了する
平成23	2011	3月31日、仏教美術資料研究センターの耐震等改修工事が完了する
平成27	2015	3月、なら仏像館の保存修理工事が完了する(展示室整備工事は平成28年3月予定)

凡例

- ・本書は、奈良国立博物館地下回廊において平成27年7月18日より開催する、「開館120年記念 写真でたどる奈良国立博物館のあゆみ」の図版目録である。
- ・本書の編集・執筆は、野尻 忠(学芸部企画室長)(3・5・6・10・12・13・略年表)と宮崎幹子(学芸部資料室長)(1・2・4・7・8・9・11・14)がおこなった。
- ・本書に掲載した写真は、佐々木香輔(学芸部資料室員)、森村欣司氏・矢沢邑一氏(元奈良国立博物館)が撮影したほか、宮内庁正倉院事務所(3左上)より提供を受けた。

編集・発行

奈良国立博物館

〒630-8213 奈良市登大路町50番地

印刷・製本

株式会社 大伸社 (ライブアートボックス)

発行日

平成27年7月18日

